

2024年9月1日（日）主日朝礼拝説教

『終わりの日の復活』 井上隆晶牧師

使徒言行録 20 章 7～11 節、ヨハネによる福音書 6 章 39～51 節

①【私たちの復活は主が望んでおられる事】

キリストは何のために天から降って来られたのでしょうか。イエス様自身がその答えを語られます。「私が天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、私をお遣わしになった方の御心を行うためである。」(38 節) イエス様を遣わしになったのは父なる神様です。その父なる神様の御心を行うために来たというのです。では神の御心とは何でしょう。それが 39～40 節に書かれています。「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心は、子を見て信じる者が、皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」

キリストに与えられた人とは、キリストを信じる人たち、クリスチャンのことですが、その人を一人も失わないで世の終わりに復活させることが神様の御心なのだということです。「わたしがその人を終わりの日に復活させる」とありますから、キリストが私たちを世の終わりに復活させます。復活とは何でしょう。それは肉体と魂が共に神の永遠の命に預かり、永遠に生きる者となることです。魂だけではありません。この肉体も死なない体に変えられるのです。キリストが来た目的は「人を復活させる」ことですから、**信仰生活の目標は「復活」**にあります。何でも目標をしっかりと持つことが必要です。舟が目的地を持たずに出かけたら、海上をさ迷うことになります。人生も同じです。行くべきところを知らず、何のために人生を生きるのかを知らない人が多いのです。それではいけません。クリスチャンの目的は「復活」にあります。それ以外を目的とすると、生き方が変わってしまいます。私は皆さんに**信仰生活の目標は「復活」**であることを知って欲しいのです。キリストが死んでゆく人を復活させるためにとった方法とは、神が人と一体になり、御自分の神性を人に与え、死なない者にするというやり方でした。それゆえに神は人になったのです。

●2 世紀のリヨンのエイレナイオスはこういいました。「神の子が人の子となった。それは人がみ言葉と混ぜ合わされ、子とする恵みを受けて神の子となるためであった。私たちは不滅性と不死性とひとつにされるのでなければ、それ以外の方法で不滅性や不死性に与ることはできなかったからである。」

キリストの生涯は、復活に向かっていた。十字架の苦難がありましたが、その向こうに復活が待っていました。人生は苦しみがありますが、それが目的ではありません。苦しみで人生が終わるのではなく、キリストと一体となった者には、必ず栄光の復活が待っていることを御自分が復活して見せられたのです。

ここではっきり知らなければならない事は、父と子の神は、私を復活させたいと思っておられるということです。私たち人間が永遠に生きることを願うよりも前に、神があなたに永遠に生きる者となって欲しいと願っておられるのです。私を復活させるためにこの方は御自分の命をかけられたのです。故に私は復活するでしょう。これほど確かなものはありません。

●先週、私はイエス様が五つのパンを手にとって「感謝の祈りを唱えられた」（ヨハネ 6：11）ということをお話しました。五つのパンとは私たちのことです。目の前にある現実の大きな問題に対して、あまりにも弱く、小さく、無力であり、何の役にも立ちません。でもキリストは私を「感謝」されたのです。私たちは自分を見て感謝できないけれども、この方は感謝されたのです。つまり神は喜んでいて、聖書は神の喜びで満ちています。神は天地を創造された時「よし」と言って喜び、人間を造られた時、喜びました。失われた人間をキリストが見つけた時「一緒に喜んでください」（ルカ 15：6）と言ひ、天でも大きな喜びがありました。キリストがこの世に来られた時、天使たちは「大きな喜びを伝える」（ルカ 2：10）と言って「グロリア」を歌いました。キリストは十字架につけられる前の日の晩、「パンを取り感謝」（ルカ 22：19）しました。自分が死ぬのに「感謝」したのです。キリストはいつも感謝しています。喜んでいます。神が私の存在を喜び、私が主を信じる者となったことを喜び、私の小さな奉仕を喜んでおられるのです。主が喜んでいて、どうして人間が喜ばないでおられましょう。キリストが喜んでいて、自分が分かった時、自分の中にある無気力、失意が吹っ飛ばし、嬉しくて飛び上がるくらいになりました。

神の思いを知ることこそ、私たちの力の源があるのです。

②【キリストが命である】

キリストと一体になるのは洗礼式ですが、その更新が聖餐です。イエス様は聖餐という方法で、私たちにご自分の命を与え続け、復活させようとしてくれます。

48節～51節「わたしはいのちのパンである。あなたたちの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。しかし、これは天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。わたしは天から降ってきた生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」イエス様は自分のことを「わたしはいのちのパンである」と言われます。英語では「I am the bread of life.」（私は命のパンである）ですが、ギリシャ語原文では「ホ（前置詞）アルトス（パン）テース（英語の is）ゾーエース（命）」となっていて、直訳では「このパン（私）が命である」となり、イエス様が「命」だという事に重点が置かれています。この世の中に本物の命はありません。この世の命を大事にしようというこの世の考え方は分かりませんが、それは神の目から見れば、朽ちてゆく土の命を必死に守ろうとしているに過ぎません。いくら守っても腐るものは腐ります。しかし本物の命につながれば腐らないのです。本物の命というものを人間は知りません。悪魔が目をお世に向けさせたからです。本当の命を知らないということは大きな罪です。

54～56 節に「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。…わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもその人の内にいる。」と主は言われます。聖餐を食べることが、永遠の命を得ることになると主は言われます。聖餐と復活は関係しているのです。これは代々の教会が教えてきたことです。

●107 年にアンティオキアの殉教者イグナティウスは「一つのパンを裂くこと、これは不死の薬、死の解毒剤であって、イエス・キリストにある永遠の生命を与えるものである。」と書いています。

さらに、聖餐によって、パンとぶどう酒の形でキリストが私の内に入って来られ、私と一体になります。こうして主は私の中に住み、私と共にこの世を歩いて下さいます。この一体であることは、私たちの肉体の死をもっても終わりません。私の内におられる主が、私を復活させられるのです。ここに私たちの平安の秘訣があります。

●紀元 202 年に、ローマ皇帝セベロはキリスト教の迫害を始めました。それが翌年にアフリカのカルタゴに及び、5 人の信徒が捕まります。その中に、22 歳のペルペトゥアという美しい女性がいました。彼女はカルタゴの名門の出で、すでに他の家に嫁ぎ、捕らえられた時には 2 歳の子供がいました。彼女の父は、深い愛から、何とかして殉教の決心をひるがえすように彼女を説得しました。しかしペルペトゥアは父親にこう言いました。「お父さん、ここにある壺が見えるでしょう。これらの物を他の名前で呼ぶことができますか。できません。私もクリスチャンという名前と呼ばれるほか、他の名前では呼ばれてはならないのです。」彼女は、何をしても信仰を捨てませんでした。そして闘技場に引き出されたペルペトゥアは讚美歌を歌い、牛の角にかけて投げ上げられた後に、剣で斬られて殉教の死を遂げたのです。

私たちも「クリスチャン」です。クリスチャンとは、キリストの物という意味です。私はキリストの物になったのです。主が私を買取られたからです。一人の信者が産まれるために、どれだけの祈りと犠牲が献げられたことでしょうか。誰もがこの信仰を持てるのではないのです。この世で苦難はあるでしょうが、必ず栄光の復活が待っています。勝利は決まっているのです。勇気を出して、この世でキリストを証してゆきましょう。